

はじめに

狭川 真一

1. 本研究の経緯

中世後期における石塔の様相が、ほぼ全国的な視野で把握できるようになるとは編者にとって夢のような話である。遡れば中世墓の全国集成を各地の研究者諸氏にお手伝いいただいたのは2003年度が最初。その後各地で検討を重ねるものの、どうしても詳細をつかめないのが中世後期の墓の様相であった。当該期の土器編年は充実してきている昨今にあって、なかなか中世墓の終焉の様子を押さえるのが難しい。それは、遺構へ有機的に伴う形での土器の出土量が著しく少ないこと、埋没までに何らかの事情で動いてしまった土器類にしても絶対量がまずもって少ないなど。これは埋葬の形態変化に伴うものであるもので、今後も大きな期待を寄せることはできないだろうと感じた。しかも遺構自体がよく分からなくなってくるのだから、実態把握は至難の業でもある。ところが、小型の石造物(石塔・石仏)を残している遺跡は数多くあるので、これを料理すれば何がしかの成果は得られるだろうと推測されたが、石造物自体に紀年銘のないものが多いうえに、地域毎に石造物の顔ぶれが異なるという点が前に進まない要因の一つであろうと思うようになった。

さらに、石塔研究の分野でも中世後期にかかる資料類の研究は、大きく立ち遅れていたと言っても過言ではない。石造物は奈良時代にかかる頃の資料群では個別の資料に関して、簡易ながらも報告があるなど一定の成果は出ていたと言えるが、それ以後では12～14世紀の石造物に研究の中心があり、さらにそれ以後のものとなると大きく立ち遅れていたのである。これは石造物の研究が石造美術という観点から優品を対象として研究されてきたことや、小型の石造物でも金石文重視の傾向があったことに要因の一部があると思われる。しかし何より、考古学的視点に立った研究者が少なく、資料の絶対量が多くなる時期

であるのに対して、チームや組織でそれに立ち向かう機運はまだ皆無に等しかった。ただ、中世後期に登場する一石五輪塔については、2005年に石造物研究会等が主催した「シンポジウム一石五輪塔の諸問題」で扱われ、一定の成果を得ている(『日引』9号でシンポジウムの成果を特集)が、中世墓の終焉という観点ではないことと、一石五輪塔以外の石造物は対象としていないので、地域的には空白になるところも多かった。

ところが、同じ石造物でも近世以降(一部中世末期を含む)では大きな成果の蓄積があった。この著名な研究として坪井良平氏による「木津惣墓墓標の研究」を忘れることはできない。これは1930年から調査され、1939年に公表されたものである。その後、元興寺極楽坊における墓標調査の成果が木下密運氏によって提示されたのが1969年で、これ以後はこうした現役の墓地の悉皆的な墓標調査は白石太一郎氏を研究代表とする国立歴史民俗博物館による調査(白石ほか2004)を待たねばならなかった。これ以後は各地の墓地で個人レベルの悉皆調査が行われるようになり、各所で類似の成果が公表されることになり、近世墓標の変遷は各所で把握されるようになった。2018年には関根達人氏による『墓石が語る江戸時代』(吉川弘文館)が刊行され、近世墓標の歴史的な重要性が世に知られるようになった。しかし、その基礎となるものは、私が知るところでは2007年から毎年各地で細かく積み上げられてきた研究成果の蓄積である(関根編2010ほか)。

これらの成果は近世墓標、近世墓地の研究を大きく前進させたことは言うまでもない。しかし、白石氏や関根氏をはじめとした墓標資料の調査研究は、紀年銘資料に頼るものであるため、これらの直前に登場する中世後期の様相については残念ながら具体的に把握されることはなかった。

上記のように研究の背景を整理することができるが、中世後期に向かって石塔が小型化し、量産化される傾向にあることは一般に知られるところであり、その実態把握となると膨大な時間を要することはすぐに想像されることである。しかし、それに立ち向かう研究自体が少なく、一つの墓地や狭い地域のなかで中世後期に該当する石塔の型式や規模、量の変化を明確に押さえた研究にはお目にかかることはできなかった。筆者も試みとして高野山奥之院における一石五輪塔の数量分布をグラフ化するなどの作業は行ったが、既存の研究成果

(巽ほか1975)を再整理するのが精一杯というところであった(狭川2013)。

そこで上記したことを踏まえ、中世後期の石造物の様相を把握することが、中世墓終焉期の様子を知る最も近道であると考え、課題を整理し、それを克服するために筆者が研究代表者となって科学研究費を申請した。その結果、2014年度～2018年度の5年間にわたって「日本中世における葬送墓制に関する総合的研究」(課題番号26284126)と題する研究費が採択された。当該研究費で中世墓の終焉に関するテーマを課題の一つに掲げ、各地において研究会を開催し、その成果を下敷きにして2018年12月8日と9日に「中世墓の終焉と石造物」と題する研究総括報告会を開催した。本書はこの研究会でご発表いただいた内容をベースに執筆いただいたものである。

なお、これまでに実施した研究会とその発表者を列記しておきたい。本書はこれらの方々およびその研究にご協力いただいた方々の成果があつてこそ成立するものだからである(発表順、敬称略)。

2016年3月12日・13日 「山陰地域における中世墓終焉期の様相」

佐伯昌俊「石見地方西部」 西尾克己・東山信治「石見地方中・東部」
木下 誠「出雲地方東部」 濱野浩美・佐伯純也「伯耆地方」
中森 祥「因幡地方」

2016年4月23日 「関東における板碑の終焉を通して」

関口慶久「茨城・千葉の様相」 齋藤 弘「群馬・栃木の様相」
磯野治司「東京・埼玉の様相」 松原典明「神奈川の様相」

2017年1月14日・15日 「東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉」

竹田憲治「伊勢・志摩・伊賀の様相」
小野木学「美濃の様相」 松井一明「三河の様相」
溝口彰啓「遠江・駿河の様相」 上垣幸徳「近江の様相」
海邊博史「河内の様相」 三好義三「和泉の様相」
佐藤亜聖「播磨の様相」 北野隆亮「紀伊の様相」

2018年2月10日～12日 「九州地域の中世墓終焉期を探る」

高橋 学「福岡の様相」 主税英徳「佐賀の様相」
柴田 亮「長崎の様相」 原田昭一「大分の様相」
池田朋生「熊本北部の様相」 永井孝宏「熊本南部の様相」

堀田孝博「宮崎の様相」 上床 真「鹿児島の様相」
2018年3月24日・25日 「四国地域の中世墓終焉期を探る」
松田朝由「香川県の様相」 西本沙織「徳島県の様相」
黒川信義「愛媛県の様相」 岡本桂典「高知県の様相」
館鼻 誠「瀬戸内の様相」

2018年6月16日・17日 「北陸地域の中世墓終焉期を探る」
伊藤啓雄「新潟県(上越)の様相」
間野 達・杉山大晋「富山県の様相」
滝川重徳・加藤克郎・川畑謙二「石川県の様相」
赤澤徳明・下仲隆浩「福井県の様相」

なお北海道と沖縄については、ここに言う中世後期と並行する時期に石造物で墓石を形成しないため、当初から除外した。ただ東北地方は筆者の時間配分が悪く、研究費の採択期間内で実施することができなかつたため課題を残している。

2. 中世後期石造物研究の課題

まずここでは、2018年開催の総括研究会での成果を踏まえて、全国的な傾向を概説し全体像を押さえていただいたうえで、各章に掲載される各地の詳細な論考で実態を把握いただけたらと思う。

今回の各論考は石造物をその中心に据えているため、地下遺構の報告が少ない点は今後の課題としなければならないことを事前にお断りしておくが、各地の墓地や寺院の一角に残される石造物にその研究材料を求めているので、現地にて再検討を行っていただくことも可能な資料が多い。その数は膨大であるので、ここでも当然のことながら全貌把握には至っていないと思うが、ほぼ初めての試みであり、これで中世後期の墓地の研究が大きく進展する契機になるであろうと考えている。しかもこれらの成果は、各地域の室町時代後期から江戸時代初期における社会の様相を写し出している部分があると思われるので、関連する時期の歴史像にも影響を与えるものになるであろう。

まず、近畿地方は中世後期も石造物の種類、量ともに豊富である。その多彩